

MITO  
明治維新  
150

徳川ミュージアム所蔵  
©徳川ミュージアム・イメージアーカイブ /  
DNPpart.com



遺跡からみた  
近現代の水戸

# 水戸市発掘。

平成30年度水戸市埋蔵文化財センター企画展

## 展示解説シート

## プロローグ ～近現代の考古学～

“考古学”というと、縄文・弥生時代など、原始・古代を思い浮かべるかもしれませんが、実は考古学に時代の制約はありません。モノから人類の営みを語る。これが考古学です。

そして今回の展示で対象とする主な時代は、明治・大正・昭和と呼ばれた時代のうち、明治元(1868)年から、アジア・太平洋戦争が終結する昭和20(1945)年までです。100年間にも満た

ないこの短い時代の中、わが国はもとより、世界の歴史は大きく変化し、さらに水戸の歴史も大きな変革を遂げました。

幕末・明治期に水戸を揺るがした天狗・諸生の動乱、明治22(1889)年に我が国最初の市制施行とともに誕生した水戸市の発展、昭和20(1945)年8月2日に水戸の町が焦土と化した水戸空襲。こうした時代の変化や変革は、私たちの足下から出土する、たくさんの近現代の遺物から読み取ることができます。

しかし近現代の遺物の取扱いは、自治体によってさまざまなのが実情です。発掘調査現場で“かく乱”と呼ばれ、捨てられてしまうこともしばしばあります。そんな中、水戸市では近現代の遺構・遺物を、変革の時代の生き証人として、積極的に保護・保存を図っているところです。

少し懐かしさを感じさせる——そんなちょっと昔の考古学の世界をご紹介します。



## 第1章 激動 ～明治前夜の水戸～

水戸藩は、迫り来る欧米列強の驚異をいち早く察知し、対策を訴えるとともに、そのための改革を有言実行した藩です。改革を主導したのは第9代藩主・徳川斉昭と、会沢正志斎・藤田東湖ら優秀なブレーンたち。彼らは強い国づくりのため、教育・産業・軍事・経済といったあらゆる面で改革を推し進めました。

徳川斉昭らが水戸で行った施策といえば、弘道館・偕楽園の建設が有名ですが、近年は「殖産興業」という、産業面での業績が目立っています。

偕楽園内に開設された陶器製造所(七面製陶所)はその代表格で、斉昭は焼き物の製造・販売を通して、水戸藩ブランドの普及に努めたのです。さらには、那珂湊に反射炉を築き、国防にも力を注ぎました。

一方、幕末の水戸藩は、急進的な改革を訴える「天狗派」と、保守的な門閥政治を支持する「諸生派」と呼ばれる2つの派閥が台頭し、お互いが政治の主導権を握るため争っていました。とくに斉昭の死後、両者の反目はますます強まり、「天狗・諸生の乱」と呼ばれる内戦に発展。多くの優秀な人材が命を落としてしまいます。

吉田松陰や西郷隆盛といった全国の志士から羨望のまなざしを向けられ、次代を担う世直しの旗手として期待されていた水戸藩の躍進と凋落。そんな激動の世相の中で、水戸は明治を迎えるのです。

鉄砲玉(水戸城跡出土)



## 第2章 建物 ～漆喰から煉瓦・タイルへ～

江戸時代までの日本の建物は、ほとんどが木造建築でした。お城などに見られる白壁は、土壁の表面に漆喰を塗ったもので、日本建築の美しさの象徴といえます。

水戸藩のシンボル・水戸城三階櫓(天守閣)は、漆喰壁に加え、正方形の平瓦を貼り、目地部分に漆喰を盛り上げた「なまこ壁」が1階部分に廻っています。なまこ壁もまた、江戸時代に発展・完成した、頑丈で美しい伝統技法です。

明治以後は、西洋から新しい建築技術が一気に導入されます。特に建物の外壁をおおう煉瓦とタイルは、日本のまちなみの景観を一変させました。江戸から明治にかけての建物の変化をよく示す遺物です。赤煉瓦の建物は、水戸市内で多く建てられましたが、残念ながら近年急速に姿を消しつつあります。現存する遺構は、旧川崎銀行水戸支店の外壁や大手橋など、ほんの一握りです。また、コンクリートの外壁として使用したタイル貼り建物も、近代のものは大変少なくなっています。茨城県庁三の丸庁舎や芦山浄水場などが代表的な遺構です。

一方、水戸市内の発掘調査では、近代の煉瓦やタイルがしばしば出土します。よく観察すると、製作年代や技法も様々で、バラエティが豊かなことがわかりますが、その分析は始まったばかり。煉瓦とタイルは、失われた近代建物の景観を補う、注目株の考古資料なのです。

大手橋のイギリス積み煉瓦



### 第3章 水道・鉄道・電気 ～ライフラインが水戸を変える～

近代になって、人々の生活を劇的に変えたのが、水道・鉄道・電気などのライフライン(生命線)の近代化でした。

江戸時代はじめに徳川光圀が命じて敷設された笠原水道は、明治44(1911)年に、江戸時代から使用してきた岩樋の中に、陶器製の土管を入れる大改修を行いました。水道管が石から陶器に切り替わることで、飲料水の供給は飛躍的に安定しました。水戸市街地全域に水道が敷設されたのは昭和7(1932)年。それまでは土管を利用した「明治の笠原水道」が、水戸市民のライフラインだったのです。

水戸の鉄道敷設は明治22(1889)年の水戸線(水戸鉄道)開通がはじまりです。以後、明治30(1897)年に常磐線、明治32(1899)年に水郡線、大正11(1922)年に水浜電車、大正15(1926)年に茨城鉄道、昭和4(1929)年に水戸電気鉄道が開通し、水戸の交通網は拡充の一途を辿ります。現在は廃線になった路線も多いですが、鉄道遺構は至る所に残っており、かつての景観を偲ぶことができます。

水戸の電気事業は、明治40(1907)年、水戸市北見町のガス発電所から送電が行われたことにはじまります。これは県内初の電気供給でもありました。主導したのは渋井町出身の前島平。前島はやがて「茨城の電気王」と呼ばれ、県内の電気事業の基礎を築いていきました。市内の遺跡からは「碍子」と呼ばれる送電の部品がよく発掘されます。水戸の電気の普及を物語る遺物といえます。



### 第4章 生活 ～洋風化する衣食住～

水戸市内で発掘される近現代の遺物で、最も多いのがガラス瓶です。ビール瓶、ジュース瓶、牛乳瓶、薬瓶、化粧瓶、インク瓶など、ガラス瓶は洋風化する衣食住に使用する様々なモノの容器として盛んに使われました。国内でガラス瓶が大量に製造されるのは明治20年代以降。水戸でも明治31(1898)年に水戸硝子製造所が作られました。

当時の食生活も洋風化しますが、主食は依然として米でした。しかし、次第に粥飯から白米飯が常食になるのに伴い、お碗はご飯が盛りやすい朝顔形の形に変化するなど、近代の食生活を反映したスタイルの陶磁器が増えていきます。

衣食住のうち、最も早く洋風政策が行われたのが服装です。明治初期から、官公吏・軍人・教員などへ洋服の着用が推奨され、ハイカラな生活の象徴となりました。明治30年代になると民衆にも次第に普及、昭和になって急激に増加していきます。遺跡から洋服が出土することは滅多にありませんが、靴などの革製品が出土することがあり、当時の洋風化する服飾文化の一端を知ることができます。

洋風化する文化生活は、衛生思想の発達をうながしました。明治21(1888)年には国内初の練歯磨が発売され、大正時代には国外へ輸出するまでになります。歯ブラシも牛骨やセルロイド・木・竹などで作られたものが盛んに使用されたことが、出土遺物からうかがえます。

昭和5年のカレンダー  
(水戸城跡出土)



### 第5章 教育 ～東洋と西洋の融合～

明治維新で活躍した人々の多くは、本来であれば幕府や藩の政治の中枢に関わることもない、軽輩の身分の者でした。彼らの多くは、優れた学問の師を求めて全国の私塾を転々と渡り歩き、いつの日か自らの手で社会を変えようと、学問にいそしみ、自己研鑽に努めたのです。

水戸藩郷士の加倉井砂山が主宰した私塾・日新塾もその舞台の一つです。砂山は伝統的な儒学はもとより、西洋の知識も積極的に取り入れ、幅広い教育に努めました。日新塾の発掘調査では、砂山の教育方針を裏付ける、西洋の遺物も出土しています。

明治5(1872)年、明治政府は学制を公布し、義務教育を含む、西洋の教育制度を導入しました。これは古代以来、学問の根本であった儒学教育から、近代科学教育への切り替えを図る、教育の一大変革でした。

すべての子どもに教育を義務づける——現代では当たり前のことですが、江戸時代は教育を強制せず、本人の「学

オランダ陶器(日新塾跡出土)



びたい」という自主性を教育の基本としていたことから、切り替えは難航します。この状況を打開するため、政府は人々になじみのある近世の学校や師匠を近代教育に組み入れました。ここに、江戸の学びと近代の学び、言い換えれば、東洋の学びと西洋の学びとの融合が図られたのです。

水戸城跡地にも、江戸時代の建物を活用しながら、多くの学校が建てられました。水戸城跡の発掘調査では、当時の学校生活を偲ぶ遺物が多数出土しています。

## 第6章 戦争 ～軍都水戸～

明治42(1909)年より、第14師団編成下の歩兵第二連隊を中核とした陸軍衛戍が、渡里村(現在の茨城大学水戸キャンパス)に置かれました。また昭和に入ると、いわゆる満蒙開拓のため、内原村や河和田村に義勇軍訓練所が設立されるなど、日露戦争後からアジア・太平洋戦争にかかる時期の水戸は、軍都(軍事都市)としての性格を色濃く有していました。

そんな性格を裏付けるように、市内の遺跡からは、戦時下の物資統制のなかで配給された焼き物である「統制陶磁器」がしばしば出土します。人々はこうした限られた物資の中で、生活を堪え忍びました。一方、当時観光地として人気だった偕楽園そばの茶屋跡の発掘調査では、配給された地味な食器を、九谷焼風のカラフルな食器に再生したどんぶり碗が出土しました。厳しい世相の中にありながらも、工夫しながら商売にいそしんだ、人々のたくましさをうかがうことができます。

昭和20年8月2日未明、グアムから飛来したB29部隊が水戸を爆撃(水戸空襲)します。市街地は一夜にして焦土と化し、死者は300人を超えました。市街地の発掘調査では、地面に突き刺さったままの焼夷弾が出土することがあります。「雨後の筍のようにニョキニョキと突き刺さっていた」という、当時の凄まじい光景が目には浮かびます。

日本政府がポツダム宣言を受諾し、連合国に降伏したのは、水戸空襲からわずか二週間後のことでした。

九谷焼風統制磁器(七面製陶所跡出土)



## エピローグ 平和 ～現代への鼓動～

水戸空襲の痛手が冷めやらぬ昭和20(1945)年8月15日、敗戦の詔勅がラジオで流され(玉音放送)、水戸市民は敗戦を知りました。敗戦とともに帝国陸海軍は解体し、「軍都水戸」も消滅。平和への第一歩を踏み出しました。

敗戦から1～2か月後にかけて、占領軍が水戸に進駐し、連合国の統治がはじまります。翌年7月には占領軍が水戸地方裁判所を接收、茨城軍令部が置かれました。軍令部指令のリンボー少佐は「驚くべきことに、茨城では、数本のドラム缶窃盗事件を除けば、総司令部指令の重大な違反事件はなかったのである」と、当時の茨城県民の秩序正しさを述懐しています。

旧弘道館には、占領軍が作ったテニスコートの跡地があります。日本の城郭には、こうした各地の占領軍が設置したテニスコートや野球場などのスポーツ施設が残っていることが多く、地方における戦後復興の軌跡を物語る遺跡といえます。

昭和22(1947)年、風戸元愛市長が公職追放となり、12月の選挙で、山本敏雄氏が第13代水戸市長に当選しました。以後、5期20年におよぶ山本市政のもと、新水戸市は昭和30年代の高度成長期を経て、復興を成し遂げていくのです。



### 開催概要

企画展名	平成30年度水戸市埋蔵文化財センター企画展 水戸“市”、発掘。～遺跡からみた水戸の近現代～
主催	水戸市教育委員会
開催期間	平成30年11月3日(土・文化の日)～平成31年2月24日(日)
会場	水戸市埋蔵文化財センター 縄文くらしの四季館
展示・編集	関口慶久(埋蔵文化財センター)

平成30年度水戸市埋蔵文化財センター企画展 水戸“市”、発掘。～遺跡からみた水戸の近現代～ 展示解説シート

平成30(2018)年11月3日 発行

編集・発行 水戸市教育委員会埋蔵文化財センター 〒311-1114 水戸市塩崎町1064-1/TEL 029-269-5090